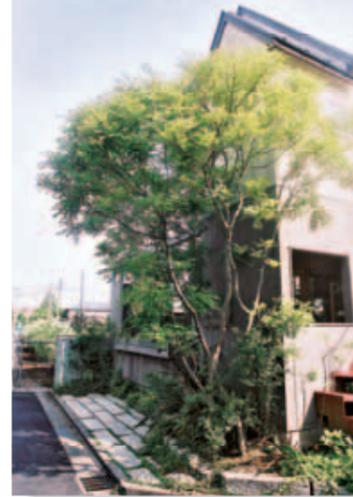




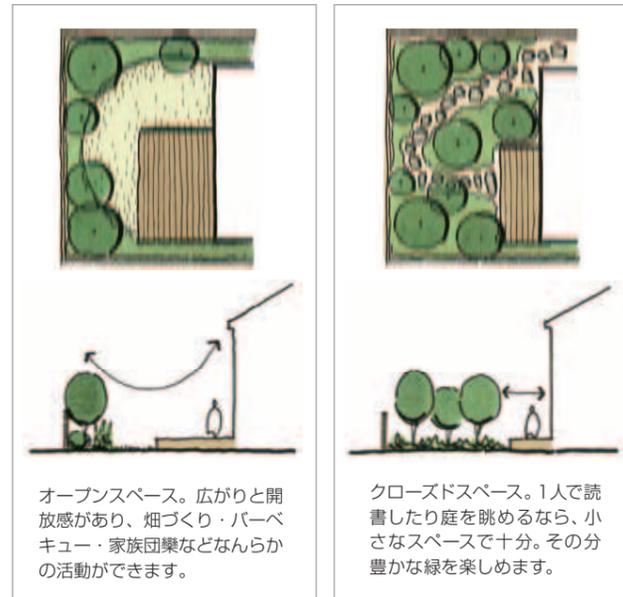
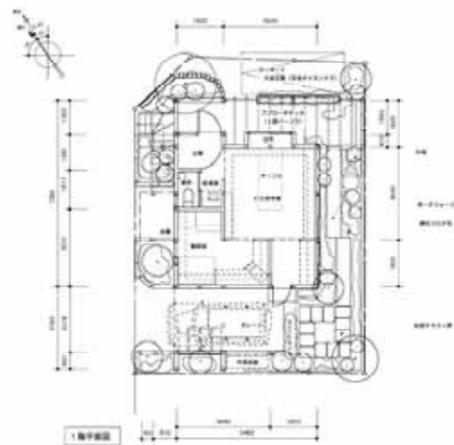
見る庭でなく、外に出て回遊する庭に。家の周囲の狭いスペースに木のボードウォークを渡して通路にしたため、子どもたちが楽しそうに行き来しています（湯浅氏自邸／右の写真も）



大谷石で舗装と土留めの骨格をつくり、高木、低木、グランドカバーを配しました。グランドカバーの植物は気ままに伸びていますが、骨格がきちんとしているので、雑然としたイメージにはなっていません。



1本の木が建物の固さを和らげ、街並みに対する景観上の重要な骨格となっています。



オープンスペース。広がりや開放感があり、畑づくり・バーベキュー・家族団欒などなんらかの活動ができます。

クローズドスペース。1人で読書したり庭を眺めるなら、小さなスペースで十分。その豊富な緑を楽しめます。



道路に面した2階のダイニングキッチンの窓は、お嬢さんの登下校を見守るやさしい窓でもあります。シンボルツリーとともに、暖かい風景となっていていつでも思い出しに残りそう（A様邸）



わが家は庭の一角を土のまま残してそこにダンゴムシがいたりする。遊ぶ娘たちは嫌がるんですが、虫がいた記憶も悪くないんじゃないかなとあえてそのままにしてあるんです。

なデザインを特徴としています。その彼のデザインポリシーのひとつが、「まず骨格を決めましょう」ということだったんです。

骨格とはハードな部分——デッキやテラス、アプローチ、塀、パーゴラといった、植物とは違う「構造物」です。ただし植物でも大きい木は骨格になります。木も庭の構成を決める重要な視覚的な要素になりますから。そして、庭の骨格をしっかりとつくっておきさえすれば、多少間違った色の花を植えようが、手入れを怠ろうが、意外と違和感なく調和してしまうものです。

逆に、骨格をきちんと構成しておかないと、まとまりがなく手間のかかる収拾のつかない庭になってしまう恐れがあります。

たとえば、前出のわが家のボードウォークも骨格です。こういうものをきちんとつくっておくと、現在結構雑草が生えるがままになってしまっているんですが、あまり気になりませんね(笑)。

広いけれど緑は少ないオープンスペース 狭いけれど落ち着けるクローズドスペース

骨格の構成を考えると、舗装や芝生などの開けたイメージの「オープンスペース」と、植物をたくさん植えた「クローズドスペース」の割合やバランスについても、検討する必要があります。

右ページのイラストをご覧ください。たとえば、庭でなんらかの活動をした場合は、デッキでもテラスでも芝生でも、あるいは菜園でもいいんですが、そういう広い開かれたスペース（＝オープンスペース）が必要になってきます（左のイラスト）。

でも、1人でお茶を飲みたいとか、読書したいというぐらいなら、

小さなスペースがあれば大丈夫（右のイラスト）。そのかわりに、緑いっぱい雑木林のような庭をつくることができます。

左は、広く感じるけど緑は少ない。右は、狭いけれど緑豊かで落ち着きがある。お客様の希望をよくきいたうえで、どちらのコンセプトが求められているかを判断して提案することが大切です。

自然がもたらす季節感、家族とのふれあい 庭は子どもの「原風景」をつくる

植物の手入れをしたくない、という人は結構多く、庭に緑を入れることにあまり前向きでない場合もあります。

しかし、やはり緑が室内から見えると、四季の変化を感じたり、癒されるなどいろいろなメリットはあるので、そういうお客様も納得して少しでも緑を入れるようにしています。

とくに、自然との接点が子どもたちに与える影響は、非常に大きいと思っています。庭というのは、子どもたちにとってはかけがえのない「原風景」になると思うからです。

たとえば僕の前風景は、今はもうその家はないんですけど、玄関先のジンチョウゲなんです。3月になると咲いてきて、すごくいい香りがする。そのインパクトが強くて、その香りがすると今もその家やその時のことを思い出します。些細なことかも知れませんが、身近に感じられる植物とか、そこに来る虫とか、そういうものが子どもの情操にとっては非常に大切なことではないかと思うのです。

わが家は庭の一角を土のまま残して、そこにダンゴムシがいたりする。遊ぶ娘たちは嫌がるんですが、泥んこになって遊んだと

か虫がいたといった記憶も悪くないんじゃないかなと思って、あえてそのままにしてあるんです。

住まい手の思い出をつくるお手伝い 誇りと責任感で質の高い仕事を

子どもにとっては、家とか庭というのは、おそらく人生のベースになる風景です。ですから、そこで自然とのふれあいを持たせ、四季の変化を感じさせながら、楽しい思い出の風景を持たせてあげるのも、親の役割ではないかと思っています。

最近、家族のシンボルツリーを植えるといったことも広まってきましたね。うちにはジュンベリーという木があるんですが、春の花から新緑を楽しみ、6月には実がなる。おいしいから娘たちが友だちと摘みでは食べています。そういうことを通じて自然とふれあい、それが思い出になるのではないかと思います。

A様邸（上の写真）は、お嬢さんの学校の行き帰りを窓から見守れるように、という考えから、2階のダイニングキッチンから道に向けて窓をつけました。毎日、窓からシンボルツリー越しに眺めるお嬢さんの元気な姿。お嬢さんにとっても、大きな木と窓迎のお母さんの笑顔は、暖かい風景になって残るでしょう。

エクステリアやガーデンの設計・施工に関わるということは、住まい手の思い出に残る大切な風景をつくるお手伝いをする事だと思います。そういう誇りと責任感をもって住まい手と向き合い、質の高い仕事をしていくことが大切ではないでしょうか。



ゆあさ つよし
湯浅 剛 一級建築士

1965年 大阪府生まれ
1988年 京都工芸繊維大学工学部建築学科卒業後株式会社一色建築設計事務所入所
1992年 同退社後英国留学
1994年 クリニッジ大学ランドスケープ学科卒業
1995年 妻・景子とともにアトリエ六耀舎設立住宅とランドスケープの設計を中心に活動

(社)日本建築家協会会員
昭和女子大オープンカレッジ講師(97~03年)
法政大エクステンションカレッジ講師(98~05年)
著書「ガーデンデザイン入門」(農文協)ほか

